

がん患者、家族の療養場所移行におけるMSWの役割

A role of social workers in health services about discharge planning for cancer patients and families.

市川 葵 (Aoi Ichikawa) 指導：小野 充一

1. 背景

医療ソーシャルワーカー（以下MSW）の業務内容において、近年病院側から最も期待されている役割は退院援助である。特に急性期病院においては平均在院日数短縮の観点からも退院援助に関するMSWの業務量が増加している。一方、患者、家族が療養場所移行に際し抱える心理社会的問題に対し、医療機関側は十分な支援が行えていないとの指摘があり、MSW、医療者にとっての課題とされている。

このような問題は積極的治療が中止となり、療養場所の移行を余儀なくされたがん患者、家族の退院援助においても「がん難民」の増加という深刻な問題として顕在化している。その他にも、療養場所移行期にあるがん患者、家族の退院援助には、「がん末期」という病状から利用できる施設や、使える社会資源が限られ、そこに患者の生命予後から見た時間的制約も加わるため、より広範囲な問題をカバーする支援体制が求められているといえる。

2. 目的

医療現場において退院援助に主に関わる職種であり、このような問題についてあまり研究の蓄積がなされていないMSWの立場から調査を行うことで、がん患者、家族の療養場所移行における支援体制のあり方に関して、重要な示唆が得られるのではないかと考えた。以上より療養場所移行期にあるがん患者、家族が抱く生活上のつらさを急性期病院で勤務経験のあるMSWの語りから考察し、がん患者、家族への退院援助の現状と課題を踏まえ検討することを目的とした。

3. 方法

(1) データの範囲と収集方法

①所属する部署が独立して存在する急性期病院に勤務している又は勤務経験があり、療養場所移行となったがん患者、家族に対し、退院援助を行ったことがある。②経験年数10年以上③患者、家族に対する退院援助の現状について問題意識を抱いている、MSWの紹介を受け、研究参加への同意を得られた研究参加者に対し、希望する日時、場所にて面接を実施した。研究参加者には約45分～90分間の半構造化面接を行った。

(2) 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（2003）を用いた。

(3) 研究参加者の属性

本研究の研究参加者となったのは女性9名、男性1名の計10名であり、ほぼ全員が各病院のソーシャルワーク部門における責任者クラスのMSWであった。

4. 結果、考察

1つの《コアカテゴリー》、9つの＜カテゴリー＞、7つの【サブカテゴリー】、27の『概念』が生成された。分析の結果から、MSWは《その人の決定プロセスを共有する》姿勢を根底に、＜ライフストーリーの中で患者、家族を捉える＞、＜他職種との連携・調整＞、＜社会資源の活用＞を同時的複合的に行いながら、＜ひっかかっている思いを聴きとる＞、＜現状の適切な理解を促す＞、＜生き抜く場所の選択を支える＞過程を＜“正念場”を越えられる関係性を築く＞ことで療養場所の選択を後押しし、＜次の場所にバトンを渡す＞援助の引き継ぎを行っていた。また、退院援助の過程で築かれた“正念場”を越えられる関係性は、援助の期間のみならず、退院後の患者、家族の生活へのモチベーションを高める＜患者、家族の再出発を支える＞ことに繋がっていることがわかった。そしてそのような援助のプロセスは、不幸にして患者が亡くなった場合においても、家族の悲嘆を軽減させる要因となること、その過程で築かれた関係性が窓口となり家族が再度MSWのもとへ相談に訪れることを可能にし、『家族の悲嘆に寄り添う』援助を行っていることが明らかになった。

5. 結論

本研究では急性期病院の熟練MSWが《その人の決定プロセスを共有する》ことを根本に据え、＜“正念場”を越えられる関係性を築く＞ことでがん患者、家族にとって、了解、納得のいく退院援助を行っていることが明らかになった。そのような関係性の形成は援助が終了した後の＜患者、家族の再出発を支える＞援助をもたらししていた。今後はそのような援助提供がどのようにすれば可能となるのか、その過程を明らかにし、実践への応用やMSWへの教育に還元していくことが必要であると考えられる。